

近世副業史論（第一報）

仙台藩における蚕糸業の研究

高橋善二郎

（I）

一般に蚕糸業が、中世における衰退の後、漸次回復し、商業的發展を示すようになったのは、近世も中期以後といわれている。慶長・元和の頃から正徳・享保の頃までの約百年間に、生糸産出高は約二倍となり、享保の頃から文化年中までに、約四倍にまで増加したといわれている。⁽¹⁾ また、この間における絹織業の発達も、関東およびその附近では、桐生・伊勢崎・足利・八王子・甲斐の郡内、奥羽地方では、福島・秋田・川俣・仙台・米沢などの各地方、その他岐阜・峰山・長浜・博多などにみられるが、こうした国内各地における発達は、これまでの西陣機業の独占的性格を崩壊する要因となった。⁽²⁾

このように発達した養蚕業・製糸業は、一般的に当時の農家経営において、もっとも利益の多い副業であったことはいうまでもなかった。さらにこれらの業が、農業生産力の発達に大きな役割を占めて農民の租税負担力を増加させたことは明確であったから、諸藩がこれに対して大いに奨励したことも当然のことといえよう。ところで、幕府および諸藩の奨励政策は、とりもなおさず封建領主の側からする自然経済からの脱出、商品経済への適応ないしは商品生産への進出を意味するものであった。すなわち藩みずからが貨幣経済にまきこまれることによって生ずる財政的窮乏、あるいは商業資本、高利貸資本への依存などは、かれらをさらに貨幣経済の中へ追い込み、貨幣への適応を必然ならしめるものであった。そしてそれは上述のごとく、一般に農民からの貢徴、あるいは農民をひきいての生産、販売事業への参加などによって果されてきたのである。また逆に租税の増徴による農民の窮乏が、藩営の諸事業にたいして絶好な地盤を与えてくれることになった。しかもその際、藩自体が商品経済の中に入り込みながらも、農民は商品経済からしめ出され、むしろますます孤立経済としての藩の中にとじ込められてしまうという矛盾が生じてくるわけである。

さてこのような当時の各藩における一般的性格・傾向と比較し、仙台藩にあってはいかなる内容性格をもつものであるかをたどってみるのが小論の目的である。

周知のごとく、仙台藩は米の豊富な藩で、財政的には領内の米穀専売という注目すべき政策をとっていたが、しかもその財政は漸次窮乏していった。寛政年間に専売で一時大利をえて財政を建て直して以来、やがてまた窮乏に陥り、後期にはしばしば節約令を出して、終には家臣から借上すら行うようになった。⁽³⁾ この意味で、仙台藩での奨励政策が他の藩とは異り、武士の保護にその目的をおき、それも高禄の武士よりも小禄の武士に重点がおかれた。従ってこれに従事するものも下級武士であり、その婦女子であった。「農家は絶体に之をみず」⁽⁴⁾ という点は、仙台藩の蚕糸業の特徴といえよう。この点を把握しておかないと藩祖政宗以来のこの業の奨励も矛盾したものになってしまう。また藩の財政的窮乏による武士階級の生活の窮乏、それを原因としての武士階級の風俗の乱れさらにはその婦女子・農民たちの本業の怠慢をまねき、藩はその収拾に策を失っていた。こうした折に藩下の名士は盛んに蚕糸業の領内普及を藩に申出る結果となり、この業に専心することによ

り僅少の利潤をえ、それが人心の乱れをとり静め、各人が本業に精励する基盤をつくる最良の政策であることを具申するのであった。

さらにまゆおよび生糸は、仙台藩にあっては、米穀に次ぐ重要な商品作物としての性格を有するものであるが、その織出しまで行っていないながら、他領に輸出せず、自領内で自家用に利用され、商品としての性格を発揮させなかった点、またこの業が百姓の本業の田畑を荒廃に導き、その利害が農業とは全く相容れなかった点などが、仙台藩の蚕糸業の性格を規定するものとおもわれる。

(2)

まず仙台藩の植桑奨励を伊達家文書でみることにする。

札 1 うるしの木壹人ニ拾五本づつ毎年うへ可申事、付ねかり無油断可仕事、1くわの木うへ、こかい可仕候、但御役被仰付ましき事、1かうず念を入うへ可申候、但御役被仰付ましき事、1たけねんを入はやし可申候、付竹ふゑ候はば、そのやぶ主に十分一可被下置事、……1くわ、かうすうるし、下之奉行人知行之内へもうへ可申候、其外兼而被仰付候通之竹木植不申候ものには為科代人足廿日つめしつかはるへく候、付むさときり取もの於在之者、為科銭小判壹兩可被召上事、右条々、相背者於在之者、堅曲事ニ可被仰付者也、仍如件、元和6年9月朔日⁽⁵⁾

さらに翌元和7年8月6日には「植林ニ関スル法令ヲ出」⁽⁶⁾して次のようにいっている。

1 うるしの木壹人に付而、毎年拾五本宛うへ可申事、付根かり油断申間敷事、1 うるしの木拾本ニ壹本、百本ニ拾本、御百姓ニ被下事、1くわの木入念うへ可申事、但御役被仰付間敷事、……元和七年八月六日（政宗黒印）安部正左衛門尉

この竹木制札の中にもみられるように、藩祖政宗の養蚕政策はかなりきびしいもので、奉行人知行にも植えさせ、また植桑を怠るものには科料や罰金を徴収するとまで記している。翌年には、政宗が竹木の御法度書御黒印を与えている。これは安部正左衛門が桑漆楮竹等植立の御用務めをしていたからである。なお翌元和8年8月の御条目には「濫不可伐採竹木並不可押売狼藉事」⁽⁷⁾と規定している。また桑を植え蚕を飼う農民にたいして、課税を免除し、諸士の屋敷内に桑樹の栽培を強制していた事実から推察してみても、仙台藩の蚕桑業の奨励政策が徹底していたことがうかがえる。この藩祖政宗の精神は、歴代の藩主によって受け継がれ、貞享3年には出入司の下に、蚕事掛の職をおき、専ら桑蚕の事に当らせていたが、この業が一般化し、領内の各所に盛んに行なわれるようになったのは、享保年間であった。

(3)

次に郡誌および村誌の中から、仙台領内で蚕桑業がどのように普及し発展して行ったかをうかがってみよう。まず領内の産地であるが、「御領内之義伊具郡・志田郡・遠田郡・栗原郡之内、三迫登米郡東山・本吉・南方・気仙郡之内村々蚕桑を以て産業を相立て、近年登米にて織出しをも被相開候由、その他は織出しを専には不仕候、……」⁽⁸⁾とあるように登米郡内でもっとも普及していたようである。登米郡誌にも「前々はこの業無之御家中士凡て農業一筋なりし由之処、村良様御深慮にて、安永明和之頃伊達郡より桑苗御買入御家中屋敷之広狭次第、多少被渡下何も植方致す、又白鳥谷本覚寺土手、鉄山土手等へ御植立御家中へ御用捨御値段にて御立付被成下、追々相開け、近世以来は世営第一に相成候……」と当時領内では、この業はまだ一般化していなかったため、疑問をもつものが多くあった。ところが登米郡内で村良が成功をおさめてからは、仙台領内各地でとり行なわれるようになった。明治維新後登米郡の士族の多くが、衣食に窮しなかったのも、村良による

郡内の蚕桑業奨励によるものと信じられている。

玉造郡誌にも享保年間に、玉造郡岩出山の領主伊達村恭が、この業を奨励した事実があり、本吉郡誌にも、山内道慶が同じ享保年間に、藩に進言して領民に養蚕をよびかけている。遠田郡誌にも天保年間には、遠田郡涌谷館主はその領内涌谷、上谷地その他数百町歩の荒廢地を開拓して、大桑園を開いたことが記されている。

(4)

かかる仙台領内における蚕桑業の発達は、とりもなおさず政宗のすぐれた政策に由来するものであるが、かれの優れた点は、財政窮乏の打解策を落下の下臣に問い、その上申をよく容れた点にあるといえよう。藩政を批判し、治国を述べ、国産を奨励したひとり油井元雄は次のように上書している。「御家中之内……難事と申は小禄之諸士に御座候、禄高聊に御座候故、父母に奉じ妻子を養ひ候さへ行届兼候仕合せ、何と仕候て文武之道をも相励、御用にも相立候様之心懸相備可申哉、其上妻子は親夫傭人之働を頼と仕、懶惰にて産業を相勤不申、奢侈之風押移、衣服飲食之類も古代樸実質之風を失ひ華美に流れ、一年之俸禄は諸雜費にさへ引足不申、……甲冑刀劔をも売代仕、……其由而来る所を探り御吟味被成候へば、貧窮と教への道之廢れ候より之事、左候儀に候間御不便に被思召、御手厚に吟味不被成下候へば難相成儀哉と乍恐奉存候、」⁽⁹⁾。かれによれば、高禄の武士の困窮は奢侈な生活からくるもので、経済の成り立つよう生活を設計すればよいのであって、問題は下級武士の方であることを上文で指摘している。そこでかれはその方法として次のようにつづけている。「其御手段は役人を被相立、桑苗を夥敷御伏方相成、御家中一統面々之屋敷々々空屋敷、又は広瀬川辺河原之分、北は杉山辺、南は小泉辺迄一字桑原に被成下、蚕仕候者へ割渡しに被成下、其他御近郷御近在之空地へも桑を植立させ、……」⁽¹⁰⁾。このような上申は相当の数にのぼり、仙台藩では嘉永7年頃、藩士に養蚕を奨励するため、桑苗を交付して、その家族に蚕業を行わせた。それ以後士族の養蚕を営むものがすくぶる多くなったといわれている。さらに文久年間には黒川郡の宮床の館主伊達宗賢、吉岡の館主但木成行等その家中に養蚕を奨励し、「蚕之節には桑市之相立候程に仕度奉存候、勿論桑苗を被下置植方迄も御世話被成下事に無御座候へば、一統之気然引立不申候、」⁽¹¹⁾という上申通り、桑苗を福島地方から取りよせ、これを領内に植栽して、養蚕業の普及をはかったのである。かれ油井元雄によれば、本業の最盛期には、家中のもの達だけでは人手不足になるから、町人や生活困窮の母子を雇い入れて使用すれば、生活の向上も計れるし、婦女子の遊惰に陥るのもふせげて、一石二鳥ではないかといっている。「蚕之盛りに罷成候へば、家内之人数計にては中々間に合不申候故、雇を相入候儀に在之、其雇入は御扶持人町人之類困窮者之妻子を召仕候様に仕度候、是も其頃に小組之頭杯より真実に仕用に給し、次には遊惰成婦女子無之様能々見聞を仕、面々本職に励み候様成行候取扱肝要に奉存候、」⁽¹²⁾。

(5)

さてこのように藩祖政宗以来おこなわれてきた蚕桑の奨励も、吉村の享保の頃から次第に発展の道をたどり、明和安永頃には士族の内職として、これを飼養するものが各地におこり、仙台藩直轄地各藩臣の領地のいたる所に桑の栽培がおこなわれ、かいこの飼育が普及するに至った。

ところが米穀を生産の第一とする仙台藩にあっては、この蚕桑業は当時全く副業的性格を脱しえず、藩の財政的危機の救済がその主要目的であって、これを大量生産に移し、藩外に輸出することによって利を計るなどといった大規模な商業資本的計画は当時全々みられなかった。

はじめは藩主や家中の需要をみたす程度のもので、いわゆる家内工業として発達したものでそれに従事する階層の主体は、上述のごとく農家は絶対にこれをおこなわず、下級の士族階級で、しかもかれらの家庭婦女子の内職としたところに、仙台藩の本業の性格がうかがえる。

遠田郡誌にも「当時下役の武士階級に於ては、家中の婦女子が愛翫的に飼育し、粗悪な自家用の太絲を製し、以て登城する其主に絹入の衣服を着せしめんが為に飼育した」とある。

また婦女子の従事に関しても「妻娘等蚕仕絹紬織出し相払可仕候」⁽¹³⁾とか「蚕飼は女子之業に而御座候得者、只今も女子計の折前に……」⁽¹⁴⁾とか「女子計蚕飼仕候様被仰付」⁽¹⁵⁾というように各文献にみられる。

この点仙台藩の蚕糸業は、福島地方においてこの業が、江戸時代の貢納制度の下で、安定した生活を送るのが不可能なために、その生活を安定させるために「副業」として営まれた事情とは大いに異なるのである。福島地方ではこの安定にこぎつくことによって、封建的領主層は、農民が土地から逃散せず、規定の貢納をそれから収納できるように、その限りにおいて農家が蚕糸業を営むことを望んでいたのである。このような意味から藤田五郎氏は⁽¹⁶⁾、米租における強力な収取が、農家の生活を不安定にし、それが副業生成の前提となったことを指摘している。

ところで仙台藩にあっては、本業が内職程度では終らず、「婦女子之本職と申儀得心不仕」⁽¹⁷⁾とあるように当時の婦女子の心得違いの点など、さらに節約を強要し、社会風紀の乱れの是正などにこの蚕桑業が利用されているのである。「御城下に蚕織を被開下候は、一ッは相続之不足を補ひ、一ッは婦女之本職を勤候筋を心得させ、懶惰を相制し候術に而、衣服之生じ候艱難をも弁まへ知候而自ら節用之勘弁をも開き候」⁽¹⁸⁾。このように婦女子に勤労、節用を心得させる一方、織方を丁寧に教諭して、その国産奨励にもつとめていた。「織方之巧者なる女を専一に御撰被成置女巧之師匠被相立、相応之御手当をも被成下、御家中之婦女子へ織方を為教候様仕度候、婦人は男子より直々之教は難受節に御座間、是非に女巧之師は女を被相立候、段々修業仕、婦女子皆織物に巧みに罷成候はば、大に成御国産に可有之候」⁽¹⁹⁾。

このような事情から推察するに、仙台藩においても財政的窮乏が封建家臣団を衰頹に導き、下級武士団一般にわたって、手工業あるいは商業に生活を託さざるをえなくなってきた事情がわかる。このことは、仙台藩における基本的な封建的生産関係の分解のきざしとみてさしつかえないであろう。

(6)

次に桑樹栽培地の問題であるが、「宜敷土地を相損候而、強而蚕桑を被相開候は悪敷御座候」⁽²⁰⁾といわれているように、桑樹が田畑を荒廃に導き、農作物とは相容れないものであることがわかる。そこで「御家中一統面々之屋敷々々空屋敷……」⁽²¹⁾とか「田畑畔道左右並屋敷居久根等へ桑植立仕……」⁽²²⁾とあるように、特別に桑園を作るということはなく、多くは家中の屋敷廻り、田畑の畦畔、河川の沿岸、その他荒廃地や山野がそれにあてられていた。もっとも畑でもその作物に支障のない程度で桑樹の植栽が許されていた。「右之外にも田畑之間に山林土手道屋敷廻り、……」⁽²³⁾、「田畑に不罷成処は、御用木又は桑漆椿等土地に叶候物植付仕候様……」⁽²⁴⁾とあるようにこれら畑作の妨げにならぬ場合にのみ益木としての桑樹の植こみは差支えないものとされていた。とくに庶民の宅地や屋敷廻りに植栽されていた事実が、各所に「只今も人々屋敷廻りに桑植立」⁽²⁵⁾というように記されている。

仙台藩領内の桑樹栽培に関する史料は、以上の程度ではなはだ少い。ひとくちにいてその栽培

方法ははなはだ原始的な域を脱しえないといえる。ところで、仙台領内の桑樹問題を取扱う際に忘れてならぬものがひとつある。それはこれまで多の人たちによって研究されてきた「立通桑園」のことである。野村岩夫氏⁽²⁶⁾にはその実証的にすぐれた著作がある。この桑園の目的は、とくに河川沿岸の畑地で、しばしば水害を被るため、作物の間に桑樹を栽培し、水害の一部を負わんとしたものであって、現在も鳴瀬川、江合川の流域区内の加美郡、志田郡、黒川郡、宮城郡、桃生郡、遠田郡、古川市、玉造郡、栗原郡などにはこの立通桑園の跡がみられるといている。

(7)

従来桑樹は、「桑樹は能く植へ著るときは、土性に拘らず野にも山にも…」⁽²⁷⁾ 自生するもので、初期の蚕育には、これら自生のものを採取していたものである。仙台藩には「伊達桑」と称する桑樹が栽培されていたが、その栽培技術も幼稚なもので、多くは植樹後これを自然に放棄しておく状態であった。そしてこの栽植の目的も、これを売却して利を計るようなものではなく、凡て自家用にあてていた。仙台領内の蚕糸業も、最初このような未熟な栽桑段階から始められたわけで、他藩と同様その原始的性格は免れえなかった。

かいては箱または葛籠などで屋敷内で飼育された。「家内に飼たる繭は、その絲野生よりは弱く、光彩も暗くて下品なり、しかれば労煩なせる程の所益乏き者なり、何となれば、毎日櫟木・宇落樹等の枝葉を採聚ること夥きを以て、薪炭少き村里なれば、必ず禍ひを作すに至り、人手間費ゆるもまた少からざる者なれば、あるいは土地に因りて宜く勘弁ある可し」⁽²⁸⁾ といわれるごとく、品質も粗悪で、多量の採枝葉は、農村経済の資源の欠乏をまねき、同時に米作に主力を注ぐべき労働力を削減する結果をもたらし、農村経済の崩壊を導くものと考えられた。仙台藩でもわずかながら利殖をもたらしものであるから、それに専念する農家も多くあらわれ、自然本業の田畑の作業が疎略に取扱われ収穫高にも影響を与えるものと考えられた。蘆東山も次のように上書している。「農業指働候男女共、桑取等に日を費不申儀に御座候はば害にも相成申間敷候得共、蚕は目立候程之金に相成申物に御座候に付、人方限り飼候得ば、自然と御田地方疎略相成、其害難償事に御座候」⁽³⁰⁾ とか「其品相尋候得ば、蚕飼に耽り候方より、農業自然々々に疎略に相成、飯料にも相満不申、且畑へ桑植立候得ば、雑穀も不足仕、畢竟蚕飼一通り之出高を以て上納諸役始年中相介候事故、行届兼申候由に相聞得候、是皆本を忘れ候故之害にて御座候、依之聖制之通桑植立之儀は、御停止被仰付可然奉存候、」⁽³⁰⁾ とその桑樹栽培を停止するよう具申しているほどである。

佐藤信洸は門人加藤文太郎と共に文化二年仙台領内で、特殊な野蚕、いわゆる白繭野蚕を発見し綾織に織らせたところ、「光彩極て美麗にして、大に世上の綾織に異な」⁽³¹⁾ っていることに驚いた。筆者は、仙台平の原料がこの野蚕飼育にあるものと推定する。佐藤信洸はさらにこの織地を、他の桐生や西陣の本業として営む地方のものと比較して、「其絲の上品にして絹の丈部なるは仙台綢袴地」⁽³²⁾ と仙台綢袴地を筆頭に数えあげ、その原料の野蚕の優秀性を認め、その産出を奨励している程である。「種々織現成の花絹は、京都西陣に学ぶべし。」⁽³³⁾ といわれているように、仙台領内においても、最も進歩した西陣の方法を採用する当時の一般的傾向に従い、織物産出に力を注いでいたことがわかる。野村岩夫の著書⁽²⁴⁾ にも、「生糸の奨励は正徳年間京都から織物師を召して機業を創始することになって漸く盛んとなり、古来奥仙の名を以て顕はれ、本吉、登米、気仙の各郡より産出する生糸の如きは、京都地方に又伊具、亘理の各地より産する生糸は南糸と称し、福島伊達地方へ輸出され、殊に本吉郡より製出する生糸は之を金華山と称へ、仙台平の原料となり、袴地として各地に輸出されるに至った」と記している。この南糸は伊具郡金山から織出されたもので、「以五綵。

而為從横経緯。俗謂之島紬。其好品者甚貴。贈仕邦以奇投。焉人謂之仙台紬。以賞之」⁽³⁵⁾といわれた程みごとなできばえであった。その他の産地として、「伊具郡丸森、館山、山田、大蔵、川張、耕野、角田、宿の近邑。刈田郡越河、斉川、白石近辺等は。伊達に近き地なれば。其産業を移すものなり。また本吉郡入谷。登米郡米谷。東山千厩、大原等の近村」⁽³⁶⁾があげられている。登米郡では「近年登米にて織出しをも被相開候由、其他は織出しを専には不仕候」⁽³⁷⁾とあるごとく、他の郡よりも早く織出しが行はれていたことが知られる。これは先に述べた城主伊達村良による奨励、教諭の効果のあらわれとみてよいわけである。

(8)

仙台領内のおおよその生産高は、「生糸御国より出る分御蔵物罷成候へば、末々御利潤に可罷成奉存候。右は唯今にては百駄之余出産仕候、年に寄候ては百五拾駄前後も出産可仕候、大凡三万両前後之本金に罷成申候、」⁽³⁸⁾とあり、年々増産され、それからの利潤もあがるので、「下にて利を争い商道之筋相立不申義又買締売同様の奸も生じ」⁽³⁹⁾てくるので、「奸民ども争ひ相出不申様、平均之姿に御取行不被成下候へば、小前之百姓活動可仕奉存候、」⁽⁴⁰⁾と申出ている。油井元雄も、「一家に付候ても拾両ヅツも利潤有之候様に被成下度奉存候、小進之族拾両之金は中々以尋常にて難得、」⁽⁴¹⁾と糸の買上げを行い、一家に十両づつ渡し「蚕之諸雑費、日雇銭等勘定之上面々に被相渡、」⁽⁴²⁾としたらどうかと上書している。

仙台織(平)の創始の目的は、「商人へ安値段に被払下、他所へ売渡させ、御国産を被相開候様に…」⁽⁴³⁾との多くの上書にも拘らず、決して領内産業の発達に資するためのものでもなく、また下級藩士の生計補助のためのいわゆる家内工業を起さんがためのものでもなかった。全く藩主の自家用品として、あるいは幕府、諸侯への贈答品及び下臣たちへの下賜品として生産されていたものであった。すなわち「織物之手を撰被成置相抱、種々之絹類を織出させ」⁽⁴⁴⁾たといわれるように、織工には俸禄及び原料買入資金を給与し、職場も与えて藩の下命品の生産に従事させた。しかも一般市場を目的とする商品生産はもちろんのこと、家中の注文に応ずることすら禁じられていた。その頃の記録に「錦・金欄・緞子・綸子・八反掛類の名称」⁽⁴⁵⁾がみられ、その他紋織、丹後縞などを織っていたが、それらを「御国織」と称していた。このような結果、仙台藩の蚕糸業もその目的が国内需要の補足程度のものであったことが判然としてくる。他藩と比較して仙台藩、は自然経済から商業資本への移行も、自然に遅れたことは事実である。

(9)

封建領土内における貨幣の発達、土地経済の基盤に立脚する封建経済の分解、崩壊をまねき、わが国においても各藩一様に商業資本のかい入をゆるし、商業資本に対する依存度を高めた。その結果は、各藩ともに財政的窮乏に陥り、封建下臣団の生活困窮は激化していった。仙台領内においても同様の傾向をたどり、弘化年間の借金は一百万両で、文久以後十萬石の格式をもって節約をおこなう状態であった。寛政末年から大阪の両替商升屋平右衛門が蔵元、掛屋となり、その調達によって藩財政を補充し、ついには升屋によって藩財政を全く左右され、幕末に至っている。⁽⁴⁶⁾ 下級武士たちも、「勝手困窮之由申立にて青物等を荷ひ売歩行、其形誠に見苦敷、且町人共に賤しめられ候由」⁽⁴⁷⁾とか「城下最寄郷と申すは福田と云所に在郷足輕とて三百人も有之、是は四石位づつ田畠土地にて渡置候由、此者共も同く青物等売歩行候。」⁽⁴⁸⁾という実状であった。それに加えて「凡衣服器財皆之を他邦に求む」⁽⁴⁹⁾という仙台領内の事情も手伝って、「然も士民共に狡猾、自ら便宜を択て

労を他に施すの風あり人々怠懈を以て得たりとす是其貧なる所以なり」⁽⁵⁰⁾ という意見をはかせる結果となった。かかる意味での仙台藩の奨励政策の着眼は、まずよしとしても、それが士農層とくに武士階級の副業として、生産の結果は自領内の自給に供する程度のものであったことは、藩自体の経済活動の積極性の喪失と筆者はみる。その原因はどこにあるのかといえ、周知のごとく仙台藩にあっては米穀こそ国産の中で最も重要な地位を占めるものであって、買米制度、江戸輸出などただ単に藩内自給自足の段階にとどまらず、これを積極的に藩外に輸出して、利潤を得ていたほどで、栽桑、養蚕と相容れぬものがあったからである。具体的には、その栽培飼育においても、田畑に植樹することを禁じ、不用の地としてほうむられている田畑の隅や畦畔に点植されていたのである。もち論桑は土地の肥度にはあまり関係のないものであったから、いかなる場所に植栽されてもよかったのであるが、仙台藩では、米穀ほど重要視されていなかったのが、その理由の一つである。また領内の各養蚕地も、これを伊達郡、信夫郡と比較すると、わずかにその百分の一にも足りないものであった。耕作期と蚕桑期が同時であった仙台藩にとっては、農業と養蚕の利害全く相容れなかったのである。田畑の少い伊達郡、信夫郡が農耕より蚕業に専念した事情とは全く異なり、技術的な面からみても、全く原始的な域を脱しえなかった。

農家は絶対にこれを見ず、という初期の性格も上のような事情があるとすれば当然のことであった。しかし漸次農村にも普及していったことは事実であった。当時蚕糸業で利益を得ていたのは下級武士たちであり、農民の利益は実に稀薄なものであった。仙台藩の蚕糸業が、次期近代国家形成の経済的基盤としての、純粹のマニファクチュアーとして発達なかった理由もここにある。

仙台藩の蚕糸業は、自然発生的な下からの発達ではなく、藩による上からの奨励政策に依存するものであった。だが仙台藩においても、下級武士及び農民層に対する奨励政策という範囲内で、それがもたらしたところの経済的、社会的影響というものを考えなければならない。すなわち、仙台藩の蚕糸業奨励は、他の藩と同様に貨幣経済への要求を根本要因として、自己の立場から貨幣経済に適應せんとするものにほかならなかった。この意味で、すでに当藩蚕糸業に定義づけられている「宮廷工業乃至貴族工業的」⁽⁵¹⁾ 性格づけに筆者は躊躇するのである。仙台藩内におけるかかる程度での当業の発達、すでに下級武士一般の中に、手工業乃至商業による生活が漸次進展していったことになる。さらに下級武士層のあるものは都市家内工業の中に労働力として吸収されていったことも考えられ、このことは、仙台領内の基本的な封建的生産関係の崩解の前兆といえよう。

明治6年の県の論告書に「方今家を富まし、身を興すの業、蚕業より善きはなし、而して養蚕の基は桑を植ふるにあり」とある。すなわちこの地において養蚕が農家一般に普及し、商業的意識をもつようになったのは、明治以後ということになる。

文 献

- | | |
|---|---------------------------|
| [註] (1) 近世社会経済叢書 8 卷47頁 | (8) 油井元雄上書 日本経済大典28卷 494頁 |
| (2) 日本蚕糸業発達史上巻33頁 | (9) 同 495頁 |
| (3) 土屋喬雄 封建社会崩壊過程の研究 | (10) 同 496頁 |
| (4) 小池基之 東北地方に於ける自然経済の崩壊 (三田学雑誌29の8) 128頁 | (11) 同 496頁 |
| (5) 伊達政宗卿伝記史料 953頁 | (12) 同 496頁 |
| (6) 同 966頁 | (13) 近世社会経済叢書 5 卷20頁 |
| (7) 同 982頁 | (14) 蘆東山上書 日本経済大典11巻 350頁 |
| | (15) 同 350頁 |

東京家政大学研究紀要 第4集

- (16) 藤田五郎 日本近代産業の生成 8頁
 - (17) 蘆東山上書 日本経済大典28巻 494頁
 - (18) 同 495頁
 - (19) 同 496頁
 - (20) 同 494頁
 - (21) 同 494頁
 - (22) 同 494頁
 - (23) 荒地起方之事 日本経済大典28巻 206頁
 - (24) 新田起方之事 日本経済大典28巻 206頁
 - (25) 庶民宅地へ桑植立候事 日本経済大典11巻 351頁
 - (26) 野村岩夫 宮城県下立通桑園の発生起因並
小作慣行に就て
 - (27) 佐藤信洸 経済要録 136頁
 - (28) 同 139頁
 - (29) 桑楮植立之事 日本経済大典11巻 250頁
 - (30) 同 352頁
 - (31) 佐藤信洸 上掲書 138頁
 - (32) 同 142頁
 - (33) 同 142頁
 - (34) 野村岩夫・仙台藩農業史研究
 - (35) 仙台叢書 3巻 427頁
 - (36) 同 443頁
 - (37) 日本経済大典28巻 494頁
 - (38) 安賀多論 日本経済大典28巻 466頁
 - (39) 同 466頁
 - (40) 同 466頁
 - (41) 油井元雄上書 上掲書 497頁
 - (42) 同 497頁
 - (43) 油井上書 同掲書 496頁
 - (44) 同 496頁
 - (45) 東北産業経済史 1巻 362頁
 - (46) 土屋喬雄 上掲書
 - (47) 仙台風談 日本経済大典46巻 521頁
 - (48) 同 521頁
 - (49) 東北風談 日本経済大典46巻
 - (50) 同書
 - (51) 日本経済史辞典 上巻1923頁
- その他の参考文献
- 藤田 五郎 近世経済史の研究
- 入交 好脩 社会経済史研究, 近世日本農村経済史
論, 経済学全集59巻
- 土屋喬雄 小野道雄 羽仁五郎
幕末に於ける社会経済状態階級関係及
び階級闘争(前篇)
- 児玉 幸多 近世農民生活史
- 楫西 光速 日本に於ける産業資本の形成
- 遠藤進之助 近世農村社会史論
- 近世地方史研究入門 地方史研究協議会
- 経済風土記 東北の巻